

# 死んだ千鳥

吉川英治

青空文庫



藪やぶ椿つばき

裏藪うらやぶの中に分け入たつて佇たむと、まだ、チチツとしか啼なげない  
鶯うぐいすの子が、自分の袂たもとの中からでも飛んだように、すぐ側から逃げ  
て行く。

(おや、白い小猫?)

と、見れば、それは七日なも前に降ふつた春の雪が、思いがけなく、  
双ふたつの掌てのひらに乗るほど、日蔭に残のこっているのだった。

『——町にも、町の人達にも、春が来ているのであろうに』

家の中に閉じ籠こもったきりの良人の姿は、ちようどそこの一塊かたまりの雪その儘ままな——と彼女は思った。

墨江すみえの耳には、世間の物音が、羨ましく聞えてくる。藪向うの

屋敷でする朝からの稽古けいこ鼓や、歌舞伎町の遠い太鼓の音や——。

江戸の屋根は、女のつつましさへ何か唆そそるように、ほの紅いひるが昼ひるが霞すみにぼかされていて、空は飽くまで碧あおかった。

『御新造様ごしんぞさま、そこにおいでで御座いましたか。——表の京染屋きょうぞめやでございませうが』

後うしろの声に、墨江はふり顧かえつて、

『ア、菱田屋ひしだやさんかえ、ちよつと待つておくれ』

藪ふきの臺とうを摘つんだ小笊こざるの中へ、藪やぶ椿つばきを一枝折おつて、それを袂

に抱えながら、彼女はわが家の台所口へ戻つて来た。

京染屋の手代は、墨江に尾いて、板の間へ腰かけるとすぐ包みを解いて、

『まあ御覧くださいまし。あの無地のお召が、とてもよい小紋に染上がりましてな。お仕立も、吟味いたしたつもりでございますが』

『ほんに新し物になりましたね。頭巾のほうは』

『お頭巾も持つて伺いましたが、ただ、お色がちと、派手気味に揚りましたので』

『まあ、よい色ですこと』

『御新造様のお好みは、お渋しぶいうちにも、やはりちと派手気味が

御意ぎよいに召すようでございますな。いや、何どういたしまして、まだまだ、御新造様などはお地味なほうで、世間は派手になるばかりでございます。路考ろこう茶ちやだとか、吉弥きちや臙脂えんじとか、それがあなた様若いお娘だけの流行はやりではございませぬので』

『これ、ちと声を静かにしやい。旦那様のお耳にふれると、又御機嫌を損じますから』

『あ、御在宅で。……これは何どうも』

あわてて腰を上げながら、勘定書かきつけを出すと、墨江は、

『……一緒に』

と、低声こごえで断つて、その水屋障子みずやしやうじをすぐ閉め切った。

西京春信

浪人してからは、米一粒の稼ぎもしていない。無<sup>む</sup>為<sup>い</sup>、坐食、そんな日がもう五年目になる――

『よく過<sup>ご</sup>して来られたもの』

と、ひらたさんごろう平田賛五郎も、われながら不思議に思う。

しかも、夫婦共にまだ、どこか以前の氣位<sup>じ</sup>を持<sup>じ</sup>っていて、そう垢<sup>あか</sup>じみた生活に疲れてもいない。

『……だが、ここらがもう、底の底だろう』

この間から賛五郎は考え初めていた。沈ちんめん酒と腕ぐ拱みした儘まま、いつぞやの雪の日からまだ下駄げたを穿はいて一歩も外へ出ていなかった。

——その雪の日であつた。

この江戸へ来てから知しりあ己いになつた浪人仲間の友達が三、四人打ち連れて来て、

(どうだ、貴公も行かないか。ぜひ一口入れ。吾々が世に浮かび出る千載せうさいの一遇ぐうが来たのに、その機会を逃のががすなどという法があるものか。——なあ御新造、そうじゃないか)

と、いう熱心な勧め方。

良人の友人達から、そう云われると、墨江は、良人以上、乗り



気になつて、

(そういう事なら、ぜひ共、主人もお加えくださいませ。とかく良人は引つ込み思案じあんで、今日迄にも何遍なんべん、仕官の口を外はずして居りますことやら——)

などと口を極めて云つた。

それ程迄に、妻も云うので、

(行こう、今度は)

と賛五郎も遂に、同行を約した。

出発は二月初旬。もう日は迫っている。

江戸表から立つ仲間仲間は、ざつと十名ぐらいになるだろうとの見込けいこだった。そして、約二カ月程、京都の竹林院の道場で稽古けいこを励はげ

み、そして悠々、静養の上で、四月下旬の三十三間堂の競きそい矢やに立つという予定なのである。

浪人仲間の一部で、

(世に浮かび出る時が来た)

と云っているのは、寛かんえい永しゅうとく、正徳以来、ここ五、六十年間

の通し矢は、御三家や各藩士の間でばかり競技が行われて来たが、今度は、遍あまねく天下の隠れたる弓仕ゆみしに、あの曠はれの場所が与えられ、藩士以外の上手が見出される事になったのを歡んでいるのだった。

(——時節が来た)

平田賛五郎も、はつきりとそれを感じている。彼とても、妻の

云うように、決して、引っ込み思案が天性ではない。

いや、男の沈<sup>ちんめん</sup>湏<sup>ん</sup>には、妻以上の鬱<sup>うつ</sup>勃<sup>ぼつ</sup>がつつまれている。

——だが、さし当って、その仲間へ加入して京都へ上<sup>の</sup>落<sup>ぼ</sup>るには、  
どうしても、四、五十両の金は入用だった。三十三間堂の堂衆や

帳<sup>ちよう</sup>前<sup>まえ</sup>という役目の者に、心付けも要るそうであるし、加入金

は二十両はどうしても調<sup>と</sup>え<sup>との</sup>て行かねばならない。その他、路銀、

身支度、逗留費なども、今の手許<sup>もと</sup>では、一両すら出来る<sup>あて</sup>的<sup>てき</sup>はない。

(そんな事仰つしやつては、生涯、仕官する途<sup>みち</sup>はつきませぬ)

墨江はそういうが、それでは、金をどうするかといえば、それは勿論、彼女にも何の成算はないのである。

彼女はただ——女ごころに——殊にそういう曠<sup>は</sup>れがましい事は

好きだし、又性来せいらいが勝気だし——一面には又、浪人して出て来た故郷元くにもとに対しても、ここで良人が、名誉を世に揚あげてくれればという射倖心しゃこうしんも手伝つて、

(お金などは、ほん気になつて、工面しようと思えば、どうにでもなるではございませんか)

と、良人の沈むほど、彼女はそれを励ます気になつて、何でもない事のように云い断きつた。

——然し、雪の日からもう七日経つたが、坐食の浪宅には、経済的には何の変化も起らない。

四、五十両の金はおろか、一日一日の糧さえ今では窮きゆう迫はくしていた。有る物はみんな売り尽していた。品物を金に代えては喰

べて来たのである。裏藪に生える蔦の臺の菜にも、この冬は喰べ飽きた。

髀肉ひにくの嘆

『——藪椿ですけれど、こうして挿すと見られましょう。お机の上にも置きましようか』  
有ありあわ合せの小さな瓶かめに、一輪投げて、墨江がそこへ持って来ると、

『何だ……花か』

と、良人の賛五郎は、興きようも湧かない顔つきで、ただ腕ぐ拱みの手を解いて、火鉢のふちへ置き代えただけだった。

花では、今の彼の心は、慰められなかった。

『あなた、ちと戸外おもてでも歩いて来てはいかがですか。雪も解け、道も乾いておりましょう。それに、今日あたりはもう、ほんに春が来たという気持——少し歩いておいでなされませ』

『——何しに』

『お気持が晴れましょう』

『おれは、そんな暗い顔つきか』

『でも……毎日こうして居らっしつては』

『もう、諦あきらめている！ 何も鬱くよくよ々くよくよしてないつもりだが』

『諦めるには早うござります。あなたもまだ三十台、わたくしもやつと二十六。お互いに、これからではございませぬか』

『年の事じゃない。今度の通し矢の話だわ』

『それも、お金さえ工面がつけば、いつでも上のほ落れる事ではございませぬか』

『いつでも？ 馬鹿な。御一同の出立はもう明後日あさって。それまでに支度が調わねば、面目ないが、落伍らくごするほかはない』

『ですから、その明後日までに』

『たわ言も、よい程にせいっ。その明後日までに金が調う位なら、こうして、髀肉もの嘆を洩もらしながら、閉とじ籠とって居りはしない』

『坐つていて、お金のできる気遣いはございませぬ』

『まだ云うかつ。では、外を歩いていたら金ができるか』

『一心になつて、何ぞ、無い考えでも出そうと思えば』

『世間はそんな物じゃない。——墨江』

賛五郎は膝ひざを向き代えて、

『そういうお前は、言葉の裡うちで、良人のおれが、こうして無策むさくな顔かほしているのを冷笑わらつているのであろうが』

『ま、そんな皮肉にお取りあそばして』

『いいや、おれの身になれば、おまえの言葉も、耳に痛い木枯こがらしのように辛く聞える。おれだとして、何日いっまで朽ちて居ようか。

しかも、今度のような絶好な機会を逃すのは、涙の出るほど残念



だが……金となつては、どうしようもない浪人生活だ。もう、

その事に就ては、云うな、云つてくれるな』

『けれど、今度お上洛りになる沖田様も伏原様も山口様も、皆御浪人のうえに、日頃のお暮しとて、私たちよりもつと貧しいお方さえあるのに』

『伏原も小網町の魚問屋に身寄があり、山口も妻の里方がどうかなる家柄だからだ。おれ達夫婦には、この江戸表に一軒の縁者もありはしない。有るのは、旧藩の江戸詰の知辺だが、故郷元を追われたおれ達夫婦の事情を知っている奴等が、一両の合力もしてくる筈はなし——又そんな所へ恥曝しをして迄、出世に促したくもない。——ええもう、云うなというのに、諄い奴だ』

賛五郎はごろりと横になって、世に入れない鬱々とした顔を、  
手枕てまくらにのせて眼を閉じた。

『平田殿。——居らっしゃるか』

門口の声に、

『お、伏原様に庄司様しょうじ、お揃いで——』

と、墨江はすぐ、出迎えて、

『あなた、いつぞや雪の日においで遊ばしたお仲間のお二方が』

良人にも告げて、敷物をそこへ並べると、賛五郎はものう懶げに起き

直って、

『先日、仲間一同の前では、ついどうかなる気で、ああ約束して  
しまったが、弱ったなあ、何と違約の詫びをしようぞ。……』

つぶや  
 呟つぶやいている間に、浪人仲間の客の二人は、浪人交際づきあいらしい打  
 解けた挨拶のうちに坐り込んだ。

そしてすぐ、勝手元の墨江の方へ、

『御内方おうちかた。鴨かもを一羽提さげて参ったのだが、何と、酒と鍋の物の  
 支度をしてくださらぬか。明日あすとなつては気忙きげわしないから、明後あさ  
 日つての門祝いをやってしまうのじゃ。……どうだ平田殿、いい鴨だ  
 ろうが、飲めるぞこいつは』

と、伏原半蔵という四十がらみの浪人は、縄なわで提げて来た鴨の  
 首を高くさし挙げて笑った。

## よく似た男

青物屋とか酒屋とか、ちよつと其処そこらへ小買物に出るのでも、彼女は身綺麗なたしな羨うらやまみを怠たらなかつた。いや、貧ひんしくなればなる程、墨江は細心に、薄化粧うすげしやうや襟元えりもとに気をつけた。

若いし——縹きりやう緻ちゆうは優れているし——それに世間摺ずれていないので、零落おちぶれてもまだ多分に、五百石取の若奥様わがうさまだった香ほいが灰ほかである。

『じゃあ、すぐ届けておくれ』

酒屋でも青物屋でも、彼女が鷹揚おうようにそういえば、何処どこでも、

『へい、すぐお後からお届けいたします』

嫌な顔をする店はなかつた。

その癖、去年の年暮くれの払いも、まだ滞とどこっている程だったが。

墨江は、そういう世間が世間だと思っていた。そのうちには良人が仕官する。支度金が下がる。——だから例え質屋の門を潜くぐつても、元の品位と権式だけは捨ててはならない。そう信じていた。それにつけても今度の機会は惜しい。

良人の平田賛五郎は、元々、弓仕の家筋の人なのである。賛五郎の実兄の平田文吾ぶんごは、現在でも熊本もとの国許で細川家の弓道師範ならをしており、禄ろく高だか四百石、日置流へきりゆうの弓では九州でも並ぶ者のない人だが、賛五郎はその兄をも凌しのぐ上手だといわれていた程だ

った。

(口惜しい。——何としても)

彼女は、良人<sup>びいき</sup>鼻<sup>びいき</sup>負<sup>びいき</sup>な気持ばかりでなく、そういう良人を持ちながら、今度の三十三間堂の通し矢に出せないかと思うと、自分のせいのように、<sup>まぶた</sup>瞼<sup>まぶた</sup>が熱いものに霞んでくる。

国表<sup>あに</sup>の実兄<sup>あに</sup>や親戚へ云つてやれば——とも考えるが、日数の程が間にあうまいし、又、日数があつても、金子<sup>きんす</sup>の頼みなど、受け付けてくれる身寄はないかも知れぬ。

(不義者の果てが、よい態<sup>ごさま</sup>な!)

(御勘<sup>ごかん</sup>氣<sup>き</sup>の者に、一切<sup>かま</sup>関<sup>かま</sup>うな。関<sup>かま</sup>うては、藩の御法を犯すことにならうぞ)

遠い国許にいる知辺しるべの顔が、みな嘲ちやうしやう笑しやうの齒を向けているように僻ひがまれる。いや僻ひがみではない、当然そう思われているに違ちがい。

(わけても彼あの—— おおむだきんべい 大牟田公平が)

大牟田公平の事を考え出すと、彼女は昼間の町中でも、思わず背を振向いて、何かに狙つけられているような眸まなざしをした。

賛五郎がなければ、当然自分は、公平の妻となっていた体である。

大牟田家では、自分と公平との結婚を、藩庁まで届け出してあって、折を待っていたのであったが、その間に、恋はあらぬ人と結ばれてしまった。

こういう場合——藩の法規は、当然、自由な恋愛から生れる結婚などは認めない。風評が立つと共に、

(御勘気。——放逐ほうちく)

の嚴命が、恋の凱歌がいかと取り代えに、賛五郎の身に降くだった。

(彼の公平あが、あの儘黙まつて、国許で他の妻を持つているかしら？ ……)

裏切った男の恐い顔つきが、絶えず後うしろから来る気がして、墨江は髪かみの根が寒くなる。

——今も。

酒屋や青物屋へ届け物を吩咐いいつけておいて、家の方へ戻かへつて来ると、露地の曲まがり角かどに、一人の武士たたずが佇たたずんでいる。



遠くから姿を待つて居たように、その男の編笠あみがさは、墨江の方を正視していた。

『……あつ？』

気のせいか、墨江には、その編笠の背恰好せかつこうが、今もふと、胸の中で嫌な気持ちに思い出されていた大牟田公平そっくりに見えた。あわてて、彼女はべつな横丁へ曲がった。足のくろぶしがわくわくして、振向いて見る勇氣もなかった。道を廻まわって、藪やぶづたいに、わが家の台所へ戻かえつて来てから、初めて、

『……あんなよく似た人があるかしら？』

と、眩くらいつぶやて、もいちど藪の中を見廻まわした。

## 断念

鴨の肉がわずかに皿に残っている。

もう酒とも呼ばない。

主客三人とも、充じゅうぶん分、酔いがまわっている様子で、

『まだ二日あるのだ、何とか工面がつかぬか。ええ、おい平田うじ氏』  
伏原半蔵が云うと、連れの庄司隼太しゅうじはやとという男も、

『高利貸しるべに知辺しるべはないのか。抵てい当とうと云うたら、この首で貸せと  
いうのだ。その位、押し強く出なければ、金策などは出来るもの

か。大体、ここの夫婦は、ちとおとなし過ぎる』

と、楊枝ようじで齒をせせりながら云う。

賛五郎は、酔わない振りを努めていたが、笑い声の底に、悪わるよ酔いしている淋しい響ひびきがあった。

『あはははは。まさか、首を抵かた当に金も貸すまい。——他ほかの御一統には、面目次第もないが、貴公たちから、違約の罪、よろしく詫びておいてくれ』

『残念だなあ』

と、伏原半蔵は長嘆して、

『通し矢の射いて手に立って、名乗りをあげるからには、各 自信たっぷりだが、おれ達の仲間では、まず今度の名誉は、平田賛五郎

に取られるだろうと定評しているのに、その貴公が、金の為に、断念するなどは、返す返す惜しい事だ。——御内方おうちかた、御内方』

『はい……』

墨江は行燈あんどんをそこへ持つて来て、客の間まに坐つた。

『もう少々、お爛つけいたしましょうか』

『いやもう酒は充分。……酒どころじやないその……金子の方さ。五十両ぐらい、何とか調ととのわんものかなあ』

『私も、心を碎くだいておりますが』

『心を碎くとは……それは家の中にいて思案している事じやござらぬか。あははは、あんと方御夫婦は、まるで内裏だいりびな雛ひなみたいに、貧乏しながら超ちやうぜん然ぜんと澄まし込んでいるからいけない。——金

を作るには、もつと、面の皮を厚うして、世間へ實際にぶつかつて、嫌な思いも、氣位も、捨ててかからにやあ出来はせん』

『そう私も、良人へ申しているのでございますが』

『平田氏の性格では出来まいなあ。こういう際には、やはり女の内助ないじよの力に待つほかないて』

『……そのわたくしが、意氣地がないので、お恥しゅうございませす』

『儘ままになるなら、自分は退ひいてもよいから、平田氏を三十三間堂へ立たせてみたいが、実は手前も、明日あしたの晩、頼母子講たのもしこうの金を競せり落して、それを懐中ふところにして立とうというあぶない算段さんだん……うまく落ちてくれればよいが、さもないと』

半分独り言のように云いながら伏原半蔵は、眼の隅から墨江を見て、

『御内方には、頼母子講のようなものに入つておいでないのか。月々、懸かけ金きんをして、何その場合に纏まとめて取る無む尽じんと申すあれなどには』

『ええ、つい、そのような平常ふだんの心懸こころがけも……』

『いや、お二人共、お若いのだから無理はない。——だが、その若い者こそ、世の中へ出してやりたいものだ。三十三間堂の通し矢で、名譽の額でも揚あげれば、あわよくば御帰参がかなうかもしれぬし、又御帰参がかなわぬ迄も、諸侯から仕官の口は屹きつと度かかつて来るが……』

『止してくれ。……もう止してくれ。おれは大小をすてて、算そろば盤ばんが持ちたくなつた。……金の工面のつかぬ身で、わずかな額に、金々と云っている程、自分の浅ましくなるものはない』

賛五郎は、そう云い放つと、酔よいに耐えないように、御免ごめんといながら横になつてしまった。

『どれ、吾々もお暇いとまとしようか。……いやもう関かまわずに。……それより御内方、風邪かぜをひかさぬように、平田殿へ何ぞ掛けてあげてくれ』

伏原半蔵は、土間の履物はきものを足の先で探りながら、手をつかえている墨江の顔を、無遠慮な眼でながめて帰つた。

影さす女めがたき讐

——お見送りの出来ないのがただ名残りなご惜しおゆうぞんじます。けれど金子は、明朝御出立のまぎわ迄に、必ずお手許まで届けさせます故、家事など此儘このまま、後顧こうこなく御上洛ごじょうらくくださいまし。五月、御吉報の矢文を、東の空でひたすらお待ち申してのみ暮しております。委細いさいはやがて分る日が参りましょう。

すみえ

旦那さま



ゆうべ客の帰らぬ間に、うたたね 転寝した儘だったので、賛五郎は夜明け方に、もう眼をさました。

——ふと、枕元の水みず差さしへ手をのぼしかけると、盆の端に、この置手紙があつたのである。

『あつ、では一途ずに。……ば、ばかな、何の的あてがあつて！』  
 勿はね起て、彼は何という事もなく、家の中を歩き廻つた。

新しく染めた小紋の着物が無い。頭巾もない。——やはり外へ出て行つたに違いない。

『世間見ずが、世間へ出て、しかも、大枚の金策をして来ようなどとは、おろかなはなはだ 愚も甚しい。金というものが、そんな単純な物なら、何も苦勞をする人間はない。——墨江にはまだ、ほんとの貧乏も金

の恐こわさも分わつていないのだ。——馬鹿、馬鹿め』

壁かべへ向むつて、賛五郎は罵ののつた。

磯いそべ辺の貝や小魚たわむに戯たわれていた子が、興きにうかれて沖へ遠く歩あみ

出いして行いつたような——愛するが故の怒こりが——堪たらない不安あになつて賛五郎の胸むねを躁さわがせた。

『無智にも程がある。生き馬の眼を抜くという言葉のある都会を何と思つているのだ。……ああ、はやく空しく帰かつてくれればよいが』

朝飯あさめしも食たべずに、彼かれは、戸外おもての登あし音おとばかり気きにしていた。

午ひるを過すぎても、墨江すみえは帰からなかつた。これは放ほつておけないと

賛五郎は考え出し、大小おほいを落おすと着流ちりしのまま、家の露地ろじから出

て行つた。

角の煙草屋たばこやの老婆が、姿を見て、葉研やげんの側からあいさつした。

賛五郎は水府すいふのたまを一つ求めながら、軽い言葉で訊きいてみた。

『ゆうべ酔いつぶれて、寝坊していたので女房の出て行くのも知らなかったが、今朝方、家内の姿を見かけなかったであろうか』

『御新造様でございますか。……さあ？ 御新造様はお見かけい

たしませんでしたが、ゆうべから、お宅様の露地口ろじぐちに、どうも気になるお人が立っておりましたので、よほど、そつとお知らせしようかと思つていたのでございますよ』

『何？ 露地の角に。——してそれは女か、男か』

『編笠を被かぶつたお武家様で、わたくし共へも立寄り、煙草をお求

めなされて、いろいろと、お宅様の様子など訊きますので、不氣味みに思うて居りましたところ、一度何処へか立ち去ったと思うと、又ゆうべも来て立っているではございませぬか』

『はての？ …… 年齢は』

『ちようど、旦那様ぐらいなお年頃で、背は、もちつと高く、薄うすあばたが顔にあつて、ずんと、田舎くさいお武家でござりましたが』

『えつ、薄あばたのあるわし位な年頃の侍だと。して、袖の紋は』  
『御紋は気がつきませんでした、言葉の訛なまりが、何処やら旦那様のお話し振とよう似ておりましたが』

『あつ……』 愕がくぜん然としたように——然しさりげなく、

『そうか、いや有難う』

賛五郎は半町ほど夢中で歩いていった。

（大牟田公平だ。——薄あばたがあつて熊本訛りのある同じ年頃の侍といえ、あの公平に相違ない！）

暴風あらしのように、種さまざま々な想像がわき上つてくる。

機おりも機でもある。

『……さては、いつの間にか、彼奴きやつと文通を交かわして、再び元の男の手へ逃げ帰つたのではあるまいか』

そう邪推じやしういもできるし、

『いやいや、彼女あれに限つて』

と、今朝の置手紙の真心らしい文言もんごんを思い出したり、日頃の

墨江を考えて打ち消してもみる。

然し、どっちにしても、かねがね彼のまま指を啜くわえて黙視もくししては居まいと考あえていた大牟田公平が、出府して、自分たち夫婦の居所を突きとめているからには、これはもう、無言の果し状をつけられているのも同様である。

(女めがたき讐！)

と、彼は自分達をさして呼ぶだろう。あの凄すごい相そうぼう貌ぼうをもつて、妻ばかりでなく、自分をも、併あわせて尾ねらけ狙ねらっている事は相像あやうに難くない。

『……もしや？ そうだ！ もしや出先で妻の身に』

不安は彼の足を自ひとりではやには迅はやめさせた。物に追われるような眼いろ

を持って、その眼は又、妻の姿を探し歩いた。

### 落ち札

『……さあ、ちとお話が御無理でございますな。ただの屋敷奉公では、前ぜんしやく借せなどという事は計つてくれませんし、前借のできる勤め奉公では——お茶屋、湯女ゆな、船宿ふなやど、その他、水商売など種々いろいろございますが、それもせいぜい年三両か四両くらいしか貸してはくれませんので、あなた様の仰っしやる五十両などという

お金は、どうしても、遊廓くるわより他には貸してくれる所はございませぬ  
『すまい』

榎屋つちやという周旋屋の手代はそう云つて、じろじろと、墨江の横顔みなりや身装を眺めながら、又云つた。

『そうそう、番町の或る御大身の御隠居でございしますが、そこならば、都合に依つては、二十両や三十両のお支度金を出して下さるかも知れませぬ。如何でございしますか、そんな傭口くちへ、ひとつ、お見得めみえなすつて御覧なすつては』

『そこは、お屋敷ですか』

『左様でございます。お名前は、御相談の成る迄申しあげられませぬが、さる御旗本の御隠居様でございましてな』



『御用向は、どんな事をいたすのですか』

『へへへへ。それはもう、二十両とか、三十金とかいう、大枚たいまい

のお支度金を出そうというのですから、云わずもがなで、お分り  
 でございますようが。——つまりその、お大名でいえば、お部屋  
 様という格で』

『ええ、お妾めかけですか』

墨江が、顔色を変えたのを、周旋屋の方では、却かえつて、呆あきれた  
 ような顔つきだった。

逃げるように、彼女はそこの暖簾のれんから往来へ出て来た。

何処の周旋屋へ行っても、同じような笑あいを浴あびるだけだった。

彼女は、自分の持っているものが、貞操ていそう以外は、誰も相手にし

てくれない事を知った。

同時に、貞操の市価を墨江は知った。世間というものが急に暗黒の表にしか見えなかった。市価づけられた一日の経験に、浅ましくて泣きたくなつた。

『……だが、良人の為なら』

ふと、そんな魔がさして、身ぶるいが出るような想像もしてみたが、さすがに、そこ迄は、自分を——いや良人の面目を——捨てきれない気持もする。

『そうだ。……伏原さんに手をついて』

墨江は、ゆうべ鴨かもを提げて訪ねてくれた、良人の友達の一人を思い出した。沢山な浪人仲間のうちでも、あの人はわけても誠実

で親切らしい。ゆうべ、帰り際に、暗示のような言葉も洩らした。

（今夜の頼母子講の金が取れれば——）と。

もう町には灯が燈つていた。伏原半蔵の間借りしている紺屋の二階を訪ねてみると、

『今し方、伏原さんは、永代河岸の更科へ行きましたよ。へい、毎月の頼母子講で、いつも蕎麦屋の更科と場所はきまつて居りますから、多分そちらでございましょう』

と、紺屋の職人と女房が云う。

墨江は一心だった。見得も外聞もなかった。すぐ教えられた更科蕎麦へ行つてみると、成程、沢山な下駄や草履が土間に脱いであつて、医者、浪人ていの男が二人、彼女の姿をじろじろ見な

がら二階へ上つて行つた。

小女に呼び出してもらうと、伏原半蔵は、その梯子段はしごだんから降りて来て、

『やあ、誰かと思つたら』

と、意外そうに云いながら、汚ない草履を突ツかけて、河岸へ出て来た。

少し酔っているらしい、伏原は赤ら顔をしていた。大川の縁ふちにしゃがみ込んで、何の用事で来たかというように、墨江が口を切る迄、黙つて小石を弄もてあそんでいる。

『……伏原様つ、わたくし、今夜は思い余つて、一生のお願いに参つたのでございますが』

墨江は、突然、おえつ嗚咽するように訴えて、白い指先を地へつかえた。

『何ですか一体……。この半蔵にそんな願いがあるというのは』  
『厚顔あつかましい女と、きつと、御立腹になるかも知れませぬが……』  
もしつ、生涯、夫婦が御恩に着ますから……』

『ははあ、分りました。頼母子講の金を、その儘、貸してくれという事ですな』

『虫のいい奴と、さだめし、お蔑さげすみでございましょうが、良人を世に出したいのでございます。良人も、あなたのお気持を知れば、死を賭としても、きつと京都の通し矢で、一の額を上げずにはおきませぬ。彼あの人は、元々、弓の家に生れているのです。お兄上は、

細川家で四百石の御師範、もし、京都の通し矢の事が聞えれば、御勘おかんき気も免ゆれ、五十両や百両のお金は、その上ならばどうにでもなるお家がらでもございます。決して、あなた様に、御損失はおかけ致しませぬ程に……』

『まあ、待って下さい。成程、昨夜お邪魔に伺った時、それとなく、御融ごゆうずう通してもよいような事は云ったが、何しろその金はまだ握っていない話の事だ。——これからちようど、その無むじん尽の競せり札が始まろうというところ、身共の手に、首尾しゆびよく札が落ちたら、その上で御相談しようではないか』

『どうぞ、お願いいたしまする』

『じゃあ、どこかその辺で、待っておいでなさい。もう、顔そろも揃

つたし、いれふだ入札はすぐ済むから』

平常ひごろ、彼女が思っていた通り、やはり伏原半蔵は優し気のある人だった。年は四十を越え、無頼ぶらいな浪人仲間みすに身過ぎみすはしているが、今の言葉でも、友誼ゆうぎに厚い事はわかる……。

そんな事を考えながら、彼女は、いくらかほつとして、暗い河岸ぶちに佇んでいた。袂から頭巾をだして顔をつつみ、川波の音に耳を澄ましていると、春の闇を、千鳥の声が寒々と空を横切つてゆく。

『まだかしら？ ……』

何度も、何度も、墨江は更科の二階の燈ひを振り仰あおいだ。そのこの障子には、大勢の影法師かげぼうしが映さしていて、時々、笑いくずれる声

が往来まで流れてくる。

『……どうぞ、伏原様に、今夜の競り札が落ちますように』  
彼女は、心のうちで、凝と祈った。

## 死ぬ千鳥

——やがて、四、五人ずつ、そろそろと更科の軒のきから人影が散  
つて行つた。散会らしい。札の結果はどうなつたろう。墨江は動  
悸うきを抱いだきながら、人目にかからぬように、わざと川下流かわしもの方へ、



ぶらぶら歩き出していた。

『——平田殿の御内方。——墨江どの』

はや  
迅い聲音が、迫つて来た。

伏原だった。その顔つきを見ると、墨江は何か直感した。

よろこ  
『欣んで下され。——札が落ちた。金もこの通り』

封金を幾つか入れた重そうな財布を出して、墨江に見せた。そして歩き続けながら、

『とにかく、先程さきほどのお話の件だが……路傍みちばたでは人に怪しまれ

ようし。……そうそう、蒟蒻島こんやくしまで知人しりびとが、出合茶屋であいちやをかね

た船宿をしておるから、そこ迄、お越し下さらぬか』

河岸ばかり多い暗い道は、墨江にとつても却つて気易きやすい心地が

した。

伏原の案内した家も、船宿構えの静かな家で、店には小女と眼の疾わる そうな老婆しか居なかつた。

『ここならば、何をお話しなされても、決して心配はない。聞えるのは、裏川の櫓ろの音ばかりで……』

四畳半の片隅に、朱骨しゅぼねの行燈あんどんが夢のように燈っていた。酒肴さかなをとつて、伏原は飲み初めた。そして、墨江にも杯をすすめたが、墨江は、下に置いただけで、身をかたくして坐っていた。

『じゃ、茶漬でも』

伏原は、あつさりと、食事にして、小女に膳を片づけさせた。それからやつと、伏原は、話を切り出して、財布のうちから、黙

つて、五十両出して、彼女の手へ渡した。

『……えっ、じゃあこのお金を』

墨江は、咽び泣いてしまった。どうあろうかと案じていた胸の凝りが、いちどに解けて、見得もなく、両手について欣し泣きに云った。

『伏原様、この御恩は死んでも忘れませぬ。きっと、この恩は……』

ほんと、煙管を下へ捨てて、伏原はその襟あしを見ながら笑った。

『あははは、何も、そうお礼にやあ及ばない。身共とても、あなたに掌をあわせて拜まれる程な神や仏じゃないのだから』

『でも……折角せつかく、あなた様にも、京都へ上落のぼるおつもりで落札おとしたお金でございましょうに』

『その意気は、お分りでござろうな』

『はい……お察さつしいたして居りまする』

『金はわずか五十両だが、その金は、身共に取っても、平田殿の望みと同様に、出世あしがの足懸がりにしようと思つていた金だ。……それをお譲りするからには、いわば男が、生涯の立身いけにえを犠牲いけにえにして、おん身に未来の華はなを譲つたも同じわけだ』

『……すみませぬ。……そう仰おんつしやられては、何やらこのお金も』

『いやいや、もう、武士が一旦たん、貸したと云つて手から放した金。

戻されても受取れはせぬ。遠慮なく役立ててもらいたい』

『わが身ながら、余りといえば、厚顔あつかましいお願い事をして、この御恩義をどうしてよいか分りませぬ』

『墨江殿……』と、伏原はずつと寄つて、いきなり彼女の手くびを握つた。

『——未来の出世をお身に譲つた男の願いを、お身も、かなえて下さるだろうな』

『えっ……』

さつと、色を失つて、墨江が後退あとずさると、

『卑怯な！』

と、伏原は男の力で息づまる程、その顔を抱きすくめた。

『男の未来を犠にえ牲にさせて、この儘、戻ろうなどと考えておいたのか。さりとは、浅あさはか慮りな。……実を云えば、恥こがしいが、人妻のあなたに、この半蔵は日頃からやる瀬ない思こがいを焦こがしていたのでござる。身共も、未来を捨てて、あなたに上げる物を上げた。——当然な事だ！ 拙せつしや者もあなたから求めるものを求めるのだ！』

『……もしっ！ ……もしっ！ ……伏原様。……伏原様。いけません！ ……待って、待って。良人のあるわたくしの身、良人に、良人に……』

×

×

×

×

薄暗い出合茶屋の店先では、奥の客を忘れたように、老婆としよりの仲居なかいと小女が、帳場ちやうばだんす筆筒によりかかつて居眠りしていた。

『……………』

川風が、門かどのれん暖簾を揺りうごかす。——その暖簾のすそに、そつと佇たたずんだ草履が見える。

侍とみえ、革足袋かわたびを穿はいて。

『……………御免』

低い声で、暖簾の間から、侍はそう云ってみたが、小女も老婆も、うとうとと、快げに居眠っているので、黙って、傍らの木戸を自分で開けて、中庭へ忍しのび足に這はい入って行った。

×

×

『……墨江、行燈あかりが消えている。……行燈を灯つけたらいいだろう』 ×

伏原半蔵の声である。

四畳半の闇の裡うちに、ほんの一瞬の時間が経つと、伏原の態度は、言葉つきまで、その前とは、まるで打って変っていた。

『………』

『何をしているのだ、畳を撫なでて。……櫛くしか、櫛ならここに落ちている』

伏原が、投げたのであろう、真っ暗な畳の上に、櫛の音が躍おどつた。

病人のように疲れた白い手が——その櫛を探って、自分のみだ



れた髪を撫でていた。墨江の息づかいも、黒髪のように乱れていた。ひそやかに身づくろいを直している衣きぬずれの音が、かなり長い間だった。そして程なく、闇の中に、二人はしいんと黙り合ってしまった。

『……あかり行燈をつけぬか、行燈を。——何ももう、済んでしまった事だ、恥かしがるにも及ぶまいが』

『……………』

『え、墨江』

『……わたくし……わたくしはもう、帰らせていただきます』

まだ戦せんりつ慄のやまないような声で、墨江が云うと、伏原半蔵は、冷淡な投げ調子で、

『帰る？ ……そうか、帰るなら帰れ。 ……だが、今渡した五十両は、こつちへ戻して貰うかな』

『げッ……あ、あのお金は』

『あの金は、<sup>わずか</sup>僅の物に相違あるめえが、<sup>僅</sup>僅の物を返せというのに、何を<sup>よ</sup>恠ツとして<sup>やく</sup>いるのだ。よこせ、此<sup>ち</sup>つ方へ！』

『……では！ ……では伏原様、あなたはわたしを、騙したので  
すか』

『知れたこつた。不服なら、何処へでも訴えろ』

『まあ！ ……あ、あんまりですつ。く、くやしい！ ……』

『この辺は、小千鳥の名物だ、まだ出合茶屋も宵のうちだし、た  
くさん泣いているがいい。 ……どれ俺は一足お先に』

泣き伏している彼女の胸の下から、先に渡した金を捲き取って自分の懐ふところ中に入れ直すと、せせら笑いしながら、伏原はすつと其の室を出て行つた。

——今し方、入口の暖簾のれん先に佇んでいた侍が、中庭へ這入はいつて行つたのと、伏原がその家の裏口からそわそわ立ち去つて行つたのと、ちようど入れ交ちがいぐらいな時間の差であつた。

『……ア！ しまった』

中庭の闇へ、編笠をかなぐり捨てた侍は、そのこの四畳半を撫なでまわす途端とたんにそう叫んだ。

もう、彼女の噉すすり泣きは、永劫とこしえにやんでいた。——俯うつつ伏した黒髪は、血しおの中へ、べつとりと乱れ、手はかたく懐かいけん劍の

柄を握っていたのである。

追いかけて

平田賛五郎は、茫然ぼうぜんと、家に帰って来た。(ひよつとしたら  
?)

と、空想して帰って来たが、やはり妻はあの儘、家に戻っていない。  
ない。

彼が一日歩いた先では、殆ど何の手懸りもなかった。

『……アア』

疲れた体を投げて、賛五郎は、空虚うつろの中に寝ころんだ。——そしてふと、意外な物を机の上にふと見出した。おととい——彼女が裏藪から一輪りん切つて活いけた藪椿つばの壺つぼのそばに——

『やつ、金だ』

封金で五つ。

紛まぎれもない正しょう金きんである。五十両の金は、妻の血の結晶のよ  
うに彼には見えた。熱いものがとめ途どなくその眼からあふれた。

『どうして？』

と、彼は妻の苦衷くちゆうをさまざまに考えてみた。——然し、そう  
思い惑うよりも、妻の希望のぞみに向つて、慕まっしぐらに進むべき自分の

重荷をすぐ感じた。

夜が明けると、平田賛五郎はもうかいがいしい旅仕度を身に着けていた。他の仲間もきょう品川の八ツ山下やに落ち合つて、そこから打連うちつれて京都へ立つ約束になっている。

少し、時刻に遅おくれたので、賛五郎が八ツ山下へ来てみた時は、もう一同の姿はなかった。然し、足を迅めて行くうちに、品川宿と大井の間で、一行十名ほどの仲間のすがたを、並木の彼方かなたに見出した。

『おうーいっ』

賛五郎が手をあげて、追いついて行くと、立ち止まった仲間の者は、皆、

『おや、来られないと云った平田殿が来たわ』

と、意外な眼をして、彼を迎えた。

その中には、伏原半蔵もいた。

半蔵の顔は、ちよつと、青ざめて、眼の底にも狼狽うろたえの光が走つたが、他の仲間と、磊落らいらくに笑い合っている賛五郎の様子をながめて、次第に安心して来たらしく、

『よう来られたなあ、平田氏うじ。——貴公が加わらない事は、実に遺憾いかんだと、今も道々、話していた所だった』

などと云つたり、

『急に御金策ができたとは、何としてもめでたい。さだめしあの御内方の優しい御内助であろうなあ。……いや、平田殿は果報かほうも』

者のじゃよ、この中では、いちばんよい女房を持っておる』

などと、要らざる事を、頻りに喋舌りかけながら歩いた。

大井の茶店でいっぷくして、浜並木へ一同がかかった時である。

——後から頻りと平田賛五郎の名を呼ぶ者がある。誰か？ ——

と振向いてみると、それも浪人仲間らしいが、編笠を被<sup>かぶ</sup>っていて、眼の前に来るまで、誰とも判断がつかなかった。

『……や？』

然し、賛五郎には、何か心当りがあつたものとみえる。異様な顔いろの裡に彼の体は硬<sup>こわ</sup>ぼつていた。編笠の男は、じつと、その前へ来て突つ立っていた。

『おめずらしのう』



笠の紐ひもを脱とつた。

色の浅黒い、薄うすあばたの男だった。——然し、恰かつ幅ぶくは賛五郎よりもずつと遅たくましくて、堂々として見えた。

賛五郎は唸うめくように……笠を脱ぐ相手の顔を凝ぎ視ようしていたが、『おう、大牟田公平か』

わざと、冷ややかに云つたが、声までが、硬かばつた舌かすに掠かれて、重く聞えた。

『賛五郎殿、其その許もとに、渡して上げたいものがあつて、急にここ迄追つて来た。——受け取つてくれるか』

『うむ。……渡す物とは、五年前の怨やいみか、刃ばか』

『これだ』

公平が取出したのは、一握りの黒髪と懐劍かいけんだった。巻いてある白紙には、生々しい血しおが滲み出していた。

『……あつ？ これは』

『墨江殿のものだ』

『うぬつ、さては』

賛五郎の手が刀の柄つかに鳴った。公平は、その肱ひじを力まかせに横へ突き放して、

『世間知らずめ。相手違いをいたすな。下手人はこの男だつ』

云いざま、公平はびゅつと身を横おどに躍らせて、人垣を作りながら傍観ぼうかんしていた仲間の一人を、不意討ちに、頭から斬きり下げた。

——わつと、血しおを浴びて打ぶつ仆たおれたのは、伏原半蔵だった。

唐突だしぬげに、仲間の者を討たれたので他の人々も、

『何をするかつ、うぬつ』

柄先つかさきを揃そろえて、大牟田公平の前後をどつと囲んだ。

春風並木はるかぜなみき

『——待てつ、待たれい。委細いさいは後で話す。逃げ隠れする程なら、大牟田公平は、遙々はるばる、国表くにおもてから出て来て、しかもここまで参りはいたさん。深い心底は、旧怨きゆうえんを捨て、以来不遇にある

と聞いた旧友平田賛五郎に、今度の通し矢の機会に、ぜひ共汚名を雪いでもらいたい——そして以前の藩地へ戻ってもらいたい——と、そう願ひにかけて出府して来たのである』

彼のことばは、今人間を斬つたとも思えないほど物静かだった。喰い付くように、浪人仲間の眼は彼をにらみつめていた。まだ充分に、その人物なり云う意味が領けないのであった。

『——然し、そう拙者のみ思つても、賛五郎の方では何と申うてゐるやらと、その気持も察しかねて、二、三日程、うろついている間に、取返しのつかぬ魔が入ってしまった。そこへ斬り捨てた伏原半蔵という魔ものでござる。魔ものの所為を、ここで、詳しくお話しする事は、自分として忍びない。……旧友の賛五郎と二

人で話したい。後の始末もありますから、どうぞ各 は平田一名を残して、一足お先にお出立くださりたい。……必ず必ず、誓つて、平田賛五郎は後より各 に追いつかせます』

——云うに忍びない事情だというので、一同は得心して、賛五郎を残して先に歩き出した。

春風の果——並木の果へ——その一行の人影はもう小さくなつた。黙然と、棒のように立っていた平田賛五郎は、突然、旧友の胸へ胸を打<sup>ぶ</sup>つけて行つて、

『公平、わかつた。……今わかつた、ゆるしてくれ。……墨江はやはり、おぬしの胸に抱かれていれば倅せだったのだ。おれと墨江とは、恋に遊ぶ事だけ知つて、世間に生きてゆく道は何も知ら

なかつた。今更いまさら、どう詫びても追いつかないが、腹の癒いえる迄、存分に、俺を打つとも斬るともしてゆるしてくれ』

男泣きに、男の胸へ、贅五郎は泣いていた。

その首を、ぎゅつと、強い力の中に抱きしめて、大牟田公平は、弟を叱るように云つた。

『馬鹿、馬鹿、いい事をして、泣くやつがあるか。御成敗は、俺はしないが、世間から受けたじやないか。——この上は、ひとつ、三十三間堂から、いい弦鳴つるなりを聞かせてくれ。そしてやはり帰る所へ帰つてくれ。——貴公の兄上、貴公の妹、それからあの老おいさ先きのみじかい御老母。みんな待っているじやないか。慥しつかり乎しる、なんだ三十男が、少しばかり世間の浅瀬あさせで溺おぼれたからと云つ

て——』

笑い交りに、公平は、まだ泣いている彼の背中を幾いくつも叩たたいた。

(昭和十二年三月)





# 青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「婦人倶楽部 臨時増刊」大日本雄弁会講談社

1937（昭和12）年3月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 死んだ千鳥

吉川英治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>